

喜田貞吉の民族史論と柳田国男の山人論 — 「山人考」とのかかわりを中心に —

湯川 洋司*

(一) 喜田貞吉 —本稿の課題に代えて—

明治4年(1871)に徳島県に生まれた喜田貞吉(1939年没)は、歴史学者として活躍し膨大な著述を残したが、その研究は同時に民俗学者としての一面も呈していた。著書の数はいたって少なく、自らが主宰した雑誌を中心に掲載した論文を通じて見解を世に問う姿勢を貫いた。そこには、自説にたえず修正を加え、補訂を施していくという研究姿勢を堅持するうで適しているとの判断があったからだというのが、悪く言えば、正確さを欠く論説の乱造といった謗りを受けることにもなる。しかし、その反面、柔軟な研究精神の持ち主であったことを示しているようにも見える。喜田の叙述は総じて平明であり、また行間からは研究対象に寄せる熱情が感じ取られ、学術研究に止まらないとする強い意志が伝わる独自の学風を持つに至った。

今日において喜田貞吉の歴史・民俗研究を総括するならば、さまざまな欠陥が指摘されよう。しかしその一方で、今なお汲み取るべき価値を持つ部分もある。彼の業績を見渡したとき、次に示す3つの研究はその中核に位置付けられるものであろう。

- 1, 古代史学者としての業績：とくに博士論文となった平城京の研究、法隆寺再建論など。
- 2, 民族史学者としての業績：日本民族形成史をめぐる研究で、とくにここでは日本(やまと)民族を複合民族として理解する態度を一貫して堅持し続けたことが挙げられる。それゆえに、朝鮮民族と日本民族とを同源視し、その融合を説く学説を展開するなど、負の方向も示すことになった。
- 3, いわゆる被差別部落研究の先駆者としての業績：とくに『民族と歴史』2巻1号の「特殊部落研究特集号」等に見えるように、被差別部落の起源・成立を異民族(異人種)に求める立場を否定し、これを社会環境(彼らの置かれた境遇)に出るものとする理解を主張し続けたことであった。(それにも限界があり、今日からみれば問題点は少なくない。)

上田正昭は、「喜田の民族史研究には、その方法において、その史料分析、資料操作などにおいて、再検討すべき多くの課題を内包する。にもかかわらず、その民族史研究が発表年次の段階でユニークであったばかりでなく、今日にあっても示唆に富む所見を包蔵するのは、日本民族や日本文化の形成と発展を、単系発展として認識せず、日本民族を単一体として認識するのは誤りで、「日本民族」は「複合民族」であり、「複成民族」であることを、多角的に論究してやまなかったところにあるといいうるのであろう」^②と、喜田の民族史研究の評価すべき特色を指摘している。

喜田を野人的学者と評する鹿野政直は、その学問の特色を「差別への照射」という表現に集

*山口大学人文学部教授

約させている。鹿野は、被差別部落史研究の開拓者である喜田が一方で民族史研究を展開していたことを捉え、双方の研究の間に「国民側の史実」を明らかにする姿勢、すなわち「『劣敗者』『落伍者』の事蹟をも史上にきちんと位置づけようとする志向に連なった」ことが共通すると指摘し、そして次のように言う。「喜田が、部落差別にはあれほど敏感でありながら、植民地である朝鮮の独立にはまったく理解を示さなかった点を捉えて、矛盾とする見解がある。けれどもかれにあってこの二つの問題は、異分子と目される存在の「同化融合」をめざすという点で整合していたのである」⁹⁴と。

この点について、小熊英二は、「喜田は大日本帝国における混合民族論の最大のイデオログであった。(略)しかし同時に彼は、混合民族論を差別解消に役立てようと努力した人物でもあった。そこには、この時代における良心的な混合民族論者の心情とその限界が、もっともはっきりしたかたちであられることになったのである」、と理解する。そして、「彼は被差別部落やアイヌの人びとと交流があり、差別のひどさをよく知っていた。(略)当時喜田ほど被差別部落の問題に正面からむかいあった知識人は少なかった。だが彼の善意は、それが強調されればされるほど、朝鮮・台湾・アイヌなどの同化を説く方向へむかっていったのである」⁹⁵と、「良心的な混合民族論者の心情とその限界」の内実を解説する。これに対し、礪川全次は『民族と歴史』の発刊趣意書(創刊号所収)に拠りながら、「喜田は、植民地諸民族の同化政策と、国内被差別民の融和政策とを同じレベルで論じたのであった」とし、小熊の理解は「この点が甘い」と批判する。そしてその後の「大東亜戦争」に至るまでの日本の植民地政策、融和政策を見ると、この大正8年(1919)の時点で喜田が思い描いた通りに進んで行ったことを思えば、喜田貞吉は単なる在野反骨の歴史学者では決してなく、村夫子然としたその風貌からは想像もつかないような、戦前の日本国家に対して最も強い影響力を行使したイデオログの一人であったと規定する。そのうえで、喜田説は「たしかに当時の対外政策と斉合性^(ツマ)を持っていたが、一面で天皇の出自を暗示する危険なイデオロギーでもあった」とし、このようなイデオロギーが「単一民族神話(明治近代国家は、もともと固有のイデオロギーとして「単一民族神話」を持っていたと考える)を抑えてなぜ「主流」になりえたのか」と問い、「この喜田という思想家をどう評価すべきなのは、今後論究を待たれる課題といえよう」と問題を提起している⁹⁶。

喜田について論じたこの文章に礪川が「ニッポン民俗学外史」と副題を付しているように、喜田貞吉の評価は日本における民俗学史上の課題にもなると考えられる。ここでは、その焦点を「複合民族論」に当て、喜田と同様の立場から柳田国男が展開した山人論と対比しながら、若干の検討を試みることにしたい。

(二) 大正6年日本歴史地理学会大会公開講演「山人考」の位置

大正6年11月18日、日本歴史地理学会談話会第百回記念大会が、東京帝国大学法科大学第27番教室を会場に350名ほどの聴衆を集めて開催され、次に示す4つの公開講演が行われた。(以下に「」で示した演題はこの大会を予告した『歴史地理』30巻5号(大正6年11月)の記事により、

() 内の演題は同誌30巻6号(大正6年12月)の「彙報」所載の大会記事による。

- ・坪井九馬三(東京帝国大学文科大学教授・文学博士)「西洋古代の民族」(同)
- ・白鳥庫吉(東京帝国大学文科大学教授・文学博士)「亜細亜北方の民族」(亜細亜北方の古代民族)
- ・柳田国男(貴族院書記官長)「山人考」(山人に就きて)
- ・喜田貞吉(東京帝国大学文科大学講師・文学博士)「石器時代の民族」(日本石器時代の住民)

であり、いずれも古代の民族とかかわる論題が掲げられている。また、この公開講演後に挙行された会員懇親会における八つの講演のほとんどが、古代の人種や民族とふれあうような内容(演題)⁹⁾となっており、当日の日本歴史地理学会大会は古代の民族をめぐる大いに議論が沸き起こったものと想像される。

さて、柳田の「山人考」(「山人に就きて」)について、前出「彙報」記事は、「柳田学士は民族研究の上に造詣深く、雑誌郷土研究を独立刊行してその研究を発表せられたる事あり、而も講題常套を脱す、されば滴堂の聴衆一語をも洩さじと好奇の耳を欬てたり」とその様子を紹介し、概要を短く報告している。その内容は、今日われわれが読むことのできる「山人考」とほぼ同じである。講演後、柳田は「歴史地理学会より山人考を書いてくれとの依頼状又来 先日もさういつたがあまり熱心でもないのです、おいたのなり」¹⁰⁾というように、その成稿化にはあまり熱が入らなかったようである。しかし、やがて大正15年11月に、『山の人生』が『アサヒグラフ』の連載に大幅に手を入れて郷土研究社から刊行された際に、附録として世に出ることになった¹¹⁾。

「山人考」の文章は、次のように始められている。

私が八九年以前から、内々山人の問題を考えているということを喜田博士が偶然に発見せられ、かかる晴れがましき会に出て、それを話しせよと仰せられる。いったいこれは物ずきに近い事業であって、もとより大正六年やそこいらに、成績を発表する所存をもって、取り掛かったものではありませんゆえに、一時ははなはだ当惑しかつ躊躇をしました。しかし考えてみれば、これは同時に自分のごとき方法をもって進んで、果して結局の解決を得るに足るや否やを、諸先生から批評していただくのに、最も好い機会でもあるので、なまじいに罷り出でたる次第でございます。

喜田が柳田に講演を頼んだ経緯はこれでは不明だが、喜田の話に柳田が「はなはだ当惑しかつ躊躇をし」たことは注意されてよい。その迷いを振り払ったのが、「自分のごとき方法をもって進んで、果して結局の解決を得るに足るや否やを、諸先生から批判していただく」ことにあったことも注目される。そこに、当時の柳田の山人研究が置かれていた状況に対する柳田なりの思いが現われているようにみえるからである。

明治末期から大正期を通じて展開された柳田の山人研究は、現在では挫折なしは放棄されたのみならずの通説である¹²⁾。その研究は、明治42年3月、『珍世界』3号に発表された「天狗の話」(後『妖怪談義』に収載)に出発し、大正2年の『郷土研究』創刊号に始まる「山人外伝資料」を経て、大正15年の『山の人生』で幕が引かれたと言える。その期間はおおよそ20年ほどに及ぶが、

柳田が最も熱心にこの問題を追ったのは、明治末期から大正初期（『山人外伝資料』の実質的終了ともいえる『郷土研究』1巻7号（大正2年9月））までの数年間であったと言える。したがって、「山人考」を講演した大正6年当時、柳田の内部では山人研究は大きな転機をすでに迎えていたとみられる。そして柳田は、3年以上の空白をおいた大正6年2月、突如として休刊直前の『郷土研究』（4巻11号）に「山人外伝資料」を書き継ぎ、完結させた。そこで、「私は力めて外側から見た山人の生活誌を多く羅列しようとしたが、今に及んで切に感ずるのは、将来この類の話が手元に集まって来る速力よりは、かの種族の性情境遇の変遷の方がいっそう急激ではなかろうかという虞である。語を換えて申すならば、確実に近しと見ゆる史料のみによって、今日の歴史家が書くような山人の歴史を書き得る時代は、いつになっても到来しそうに思われぬ」と述べ、資料収集の難しさに悩まされたことを明している¹⁰⁹。「山人考」の講演が行われたのは、その9ヵ月後であった。新たな資料の追加は望めず、講演は新味に乏しい内容とならざるをえなかった。

山人研究を志した当初、柳田は山人に関する資料を300話集めることを目指していた。明治43年10月26日付けの佐々木喜善宛て絵葉書に、「此頃非常に事件多けれども少閑を以て「山人」の話を集めをり候 御話の中に此種あらば一日もはやき、度ものに候 三百に達せば又出版するつもりに候」と書き付けたものの、同じく翌年3月19日付けの封書では「山人伝はその後僅に十二三を加え候のみに候 まだこれにては出版を企つるに足らず候に付目下段々方法を講じをり候」と記し、なかなか進捗しない状況を伝えている¹¹⁰。

これと同じ日に、柳田は南方熊楠に対しても手紙を書き、「小生は目下山男に関する記事をあつめをり候 熊野は此話に充ちたるらしく被存候 恐入り候へ共御手伝被下度候」と資料提供を依頼している。そしてその約一月後には、「山男に付ては小生は之を現在も稀々日本に生息する原始人種なるべしと信じ近日之に関する小文を公にし度希望あり其附録として諸国の山男に関する見聞談二百位を生のみ、にて蒐集し度に候」と、300という目標を200に縮小して出版する意向を南方に伝え、「切レ切レの話のみをきかせ給はり度候」と懇請している（明治44年4月16日付け書簡¹¹¹）。このとき130話ほどが手元に集り残り70話ほどに迫っていたものの、その年の8月9日付け佐々木喜善宛て封書では、南方から山に入った人間が狼に養われている者があるらしくこれを調べるように言われて、「山男の話ハ今少し考究し度点生じ候故発表を躊躇しをり候」ことを告げ、「兎に角誰も来て耕し蒔かざる広野ニ独立ちてをりながら荷物が多くて手が働かし得られぬやうな感じ有之候」と、心細いような心境をもらしている¹¹²。

そうした思いを乗り越えるかのように、柳田は「山人外伝資料」を『郷土研究』創刊号から掲げ始めたのであるが、南方熊楠との間には『郷土研究』の編集方針をめぐる論争などもあり、つい到大正5年12月23日深更から24日未明にかけて書かれた絶縁状に等しい手紙が届けられるに至った。それによれば、「小生、『郷土研究』の休刊に先だちて、この状を機会として、真の山男の意味を申し上げ置く。『郷土研究』に、貴下や佐々木が、山男山男ともてはやすを読むに、小生らが山男とききなれおる、すなわち真の山男でも何でもなく、ただ特種の事情より止むを得ず山に住み、至って時勢おくれのくらしをなし、世間にとおごかりおる男（または女）というほどの

ことなり。(略) 貴下や佐々木氏の、山男の家庭とか、山男の衣服とか、山男の何々といわるるは、この辺でいう山男にもあらねば、怪類の山獮・木客にもあらず。ただ人間の男が深山に棲むなり。(略) かかるものを山男山男というは、例の馬琴などが、江戸の市中に起こりし何でもなきことを、江戸で珍しさのあまり、いろいろと漢土の事物に宛てて、女の声する髪結い少年を人妖とか、雷声の少し変わったのを天鼓とか言うて怡んだごとく、吾輩毎度自分で山中に起臥したものなどに取っては笑止と言うを禁じ得ず候¹⁰⁹、とまで論難されるありさまであった。柳田の心中は、いかにばかりであったろうか。このように、「山人考」冒頭に示されている柳田の「当惑」や「躊躇」、さらには「自分のごとき方法」の有効性を問う態度に、南方の影響を見出すことができそうである¹¹⁰。これに対し喜田は、当時の柳田の「山人」研究に共感と理解を寄せた学者の一人であったことが逆に推測されるのである。

(三) 喜田貞吉と柳田国男 -山人をめぐる-

喜田と柳田とのかかわりや学問的交流等をめぐっては、すでにいくつかの指摘がなされている。なかでも上田正昭は編著『日本民俗文化大系5 喜田貞吉』に「柳田国男との接点」の一節を設け、「喜田は部落の問題の考察においては柳田にさきんじていた。しかし民俗に関する究明は、柳田のほうがより本格的であり、かつ体系的であった。そしてその視野は広く方法もまざっていた」と述べ、「喜田の民族・信仰・社会の研究における柳田の存在は、予想以上に大きい」とする。また、「両者のそれぞれの歴史と民俗にたいする分析視角と方法は異なつてなお両者の研究遍歴には似通ったところがある」とし、「ともに役人生活からスタートし役人生活をやめて、学究ひとすじの道を進んだこと、民間の学術雑誌を両者があいならんで主宰したこと、旅と学問の人生はこの二人の先学の歩みに共通していたことなど、その間柄には無視できない対応の軌跡がみいだされる」ことを指摘する。そうして「じっさいに、両者の関係には互いに意識しあう、学問的な刺激のこだまがあった。柳田の著作には、直接に喜田の名をあげて批判した箇所もあり、喜田の論文や日記には柳田国男に関連する発言があり、また喜田の論説には柳田の報告や研究論旨が引用された例もある。そして現実に論争があった」と述べ、「その学問の命脈の底流には、呼応するところがあったというべきであろう」と総括している¹¹¹。

また平山和彦は、両者の研究を比較し、「柳田は文献資料と伝承資料の双方に依拠しているのに対し、喜田の方はほとんどが文献史料にもとづく考察である。ちなみに彼が参照している柳田の論文は主として『郷土研究』に掲載されたもので、それは『民族と歴史』が創刊された段階ではすでに休刊となっていた」¹¹²、と述べている。また、柳田は、喜田を常に博士と呼び、喜田は柳田を君と呼んでいるが、柳田の考えを容れている点は正直に述べ、一目置いているとも記している。

喜田が柳田に一目置いているという平山の指摘は、喜田が柳田の考えや論考についてふれる場合に、これを尊重し受入れている点が目につき、正しいものに思える¹¹³。山人についても、それは例外ではない。この点を少し詳しくみてみたい。

喜田貞吉は、柳田の「山人考」の講演に2年半ほど先んじる大正4年4月2日に、史学会大会

で「日本太古の民族に就いて」を講演している。その内容は民族研究の方法を中心に述べたものであり、古伝・古記録（古文書学）、人間の容貌（形質人類学）、風俗（土俗学）の各方面に考究の眼を向ける必要を説き、日本列島には、「民族の大挙移住がしばしば行われたに相違ない」し、「いろいろの種族が、いろいろの時代に来ておるだろうと思う」と述べて、天孫の一团がやってくると「土人はもとより前代に移住していたものもこれに服従する」ことになり、大和朝廷が創立されると、「万世動くことなく、他の者は皆これに同化されてしまった。これがわが日本太古の民族の状態の、大体であろうと思う」との考えを表明している。そして同化された民族に言及する中で隼人についてふれ、「ともかくもある異種族を呼んだもので、かつて山姥とか、山男とかいう名で伝えられ、あるいは単に山間・海辺の異俗として知られておったような、異種族があったのである。これは柳田君の『郷土研究』によく材料を集めて調査されておる。なかなか面白い材料がたくさん集まっておるようであります。ある異種族が山間に遣っており、あるいは海岸僻陬に住んでおったことは、比較的後世まで、いくらか実例のあることであります」¹⁰⁹、と柳田の「山人外伝資料」を紹介しているのが注意される。喜田にすれば、「日本太古の民族」を風俗の上から究める方法として柳田の山人研究に期待するところがあり、それゆえ日本歴史地理学会の講演にも招いた可能性が推測される。

柳田は、「山人考」において、「現在の我々日本国民が、数多の種族の混成だということは、実はまだ完全には立証せられたわけでもないようではありますが、私の研究はそれをすでに動かぬ通説になったものとして、すなわちこれを発足点と致します」と宣しているように、喜田と基本的には同じ立場に立っていた。しかし、喜田が期待したかと推測されるような山人の風俗（『山人の生活誌』¹¹⁰）を語ることは少なく、『延喜式』の「中臣の祓詞」中に見える「荒振神等」、『古語拾遺』の「不順鬼神」、豊後、肥前、日向等の九州地方の『風土記』や『摂津風土記』、『常陸風土記』に見える「異人等」、『播磨風土記』の「異俗人」など、古文獻に認められる異人種をあげ、それらが後世成立した「ワキモコガアナシノ山ノ山人ト人モ見ルカニ山カツラセヨ」という神楽歌に登場する「山人」にも関係するとみる。この山人が朝家の厳重な御祭に出て仕えることの理由を明らかにすることは、むづかしい問題であるけれども、「同時にまた山人史の研究の、重要な鍵でもある」と述べ、山人の日本列島上における歴史を説明するところに講演の重点を置いている。このように柳田は山人のこぼの古さを強調し、続けてそれが近世に至って本草家などにより猿と同様の扱いを受けたことを示しながら、近代以降の山人談を収集し、そこからその歴史を跡付けようとする。すなわち、古記録を窺い、近世資料を見渡し、伝承により肉付けをするという方法を採用しており、この点で種々の山人伝を列挙する体裁を前面に出した「山人外伝資料」とはその手法をやや変えているとみなせよう¹¹¹。しかし、柳田の企ては思わしくない。

「山人外伝資料」において柳田は、山人史を（一）国津神時代、（二）鬼時代、（三）山神時代、（四）猿時代、（五）当代、の五期に分け¹¹²、その第五期の山人の存在を証明することを自らの山人研究の課題に位置づけていた。しかし「山人考」では「そこで最終に自分の意見を申しますと、山人すなわち日本の先住民は、もはや絶滅したという通説には、私もたいていは同意してもよい

とっております」と、これの証明が叶わないことを表明しつつも、「彼等を我々のいう絶滅に導いた道筋についてのみ、若干の異なる見解を抱くのであります」として、一、帰順朝貢に伴う編貫、二、討死、三、自然の子孫断絶、四、信仰界を通して新来の百姓を征服し好条件をもって行く行く彼等と併合したもの、五、土着・混淆、六、旧状保持者の六類に区分する。この第六類の旧状保持者は「次第に退化して、今なお山中を漂泊しつつあった者」とイメージされており、これが山人として現今においても眼前に現われることを予想しているところに特色がある⁽²⁹⁾。

さて喜田貞吉は、大正8年1月、「我等は日本民族の一員として、其の祖先の由来を明にし、又日本臣民の一員として、帝国建国の顛末と、其の後の変遷とを、詳にせんとするの情頗る切なるものあり」、と書き出される趣意書を掲げて、雑誌『民族と歴史』を創刊した。その発刊趣意書に、「我が古代文化の進歩は、往々局部的に発達して、僻遠の地方には、時になお異俗として原始の状態を持続せる民族の、比較的後の世までも残存せし場合、亦決して少なきにあらず。而して是等の異俗が同化融合の実を挙げ、蹟を日本民族中に没するに至りし顛末は、以て古へを類推するの料となすべきなり。歴史的研究の必要、豈是なしと言はんや」、と民族形成史研究の必要を説き、また「我等は、我国の歴史を研究する上に於て、亦決して国民側の其れを度外視して、満足すべきにあらざるなり。況や日本民族の一員として、其の祖先の由来を知らんとするに於てをや。劣敗者の地位に立ち、落伍者として存する側の事蹟、亦之を忽諸に附すべからず。而して是等の事蹟は、単に古書の繙閩のみによりて、到底其の真相に触る、能はざるなり」、と述べ、「我が日本民族が、一個の完全なる複合民族なるべきことは、人類学的調査之を証し、考古学的・土俗学的研究、之を明にす」、と宣言する⁽³⁰⁾。

同じく『民族と歴史』1巻1号所載の「『日本民族』とは何ぞや」は喜田貞吉の民族（史）観の中樞をよく示している。「我等現代の日本国民は、實際上考古学者・土俗学者・人類学者・社会学者などの謂ふ如く、一個の複合民族であることを疑はぬ。併しながら其の複合民族たるや、決して単なる寄合世帯の類ではない。我が大日本帝国の国家は、数千年来の経歴を同じうし、互に錯綜したる血縁を有し、思想と信念とを一にせる一大民族が、数千年来の歴史によって互に結び付き、相共に宗家の家長とす天皇を、元首と奉戴して居るものである。此の意味に於て我等国民は、悉く天孫民族である。(略)換言すれば我が日本臣民中には、甚だ多くの接木されたる天孫民族が混在して居るのである。是を総称して余輩は、「日本民族」の語を用ひたい」と、日本民族接木論を展開し、天孫族は先住民族を「懐柔し、彼等を撫育し、此の豊葦原の瑞穂の国を安国と平けく治らしめすべく、降臨し給ふたものと信ぜられて居る。随つて我が天孫並びに之に随従した諸神は、決して是等の先住民族を虐待し、或は之を駆逐し、或は之を殺戮し、以て其の国を奪ひ給ふといふが如き、さる残忍酷薄なる所業には出で給わなかつたのである。而して是等の先住民族の首領と仰ぐものを、古史には「国津神」と称して居る」、と述べている⁽³¹⁾。ここで注意されるのは、「残忍酷薄なる所業には出で給わなかつた」として、「山人考」で柳田が示した6つの道筋とはやや異なる過程を示唆していることである。

次いで、「特殊部落研究号」とされた『民族と歴史』2巻1号（大正8年7月発行）の巻頭に置

かれた講演記録「特殊部落の成立沿革を略叙して、其解放に及ぶ」は、全体18章からなる大論文であるが、その「十六山人と海人」では山人の位置づけにふれ、次のように述べている。すなわち、「我が国では民族によって貴賤の別を立てませぬ。先住の土着人だからとて、決して卑しい者でも何でもありません。其の早く農業に従事したものは、疾うの昔に公民になって居るのであります。唯其の中に山間僻地の地に居ったり、其の他の事情によって、早く皇化に染むの機会を有しなかったものは、往々にして落伍者となりました。日本民族といふものが段々に成立し、社会の秩序が確立して、貴賤の区別が著しくなって来ますと、もと同じものであっても、前に落伍したものは容易に仲間入りが出来にくくなります。斯ういふ者は比較的後までも疎外される事になりました。彼の浮浪生活を続けたものでありますとか、祖先以来の狩猟漁業に活きた狩人・漁夫などの如き者は、往々にして取り残された仲間となりました」という認識を示す²⁹⁰。ここに言う「皇化に染むの機会を有しなかったもの」が落伍者となったというのは、皇化が公民となることであり、公民は「おほみたから（大御田族）」すなわち農民をさしている²⁹¹から、農民化しなかったことを意味する。したがって、これになじまなず山にとどまったものが山人となるのであり、「山人とは山間の住民のことで、もと何等里人と区別のないものであっても、里人が社会の進歩と共に風俗なども変って行くのに伴はずして永く固有の習慣を存しておりましたから、いつしか変わった者の様に思はれて参ります」という理解になる²⁹²。喜田は、「近い例が台湾の生蕃と熟蕃とで」あるが、「我が内地の古代の山人は、台湾の生蕃の様に永く抵抗する程の事はなく、「朝廷の儀式にも参列して、」「早く和熟して、次第に里人と区別のないものになっ」たとし、「たまに後世に遺ったものは、」山男、山姥、鬼などと呼ばれ、妖怪変化の仲間のように思われ、「これは墮落した山人」であると説明する²⁹³。ここで喜田は、柳田が「山人考」で用いた史料に準じながらも、柳田のように山人を明確に「先住民の子孫」とは位置づけず、日本民族の同化・融合の過程から外れた落伍者とする。それゆえ、時代の進展に従い「妖怪変化」のようにみなされることになったと考えている。

ここまでふれてきたことがらをまとめれば、喜田貞吉は柳田の山人研究を、日本民族形成史の一過程として、また土俗学的・民俗学的方法による研究として評価し重要視していたとみられる。また日本民族が多数種族の混成により成立したと見る民族形成史に関する大枠については、両者まったく一致する考えを表明している²⁹⁴。しかし、山人の位置づけにはかなり隔りがある。つまり、喜田は「特殊部落民」一般を見る立場と同じく、社会の境遇に適応せずに落伍した少数者と捉えるのに対し、柳田は日本国家形成史上における闘争・帰順等の相互交渉の過程において同化を拒否して山中に潜み漂泊生活を余儀なくされた一団と捉える。したがって両者の間には、日本民族形成史をめぐる史観のうえに大きな開きがあったことが確認できる。だとすれば、その開きは民族史研究にとっていったいどのような意味をもつのか。問題はむしろこの先にあると言える。それは、山人が、種族文化複合論といかなる関係にたつものであり、またアイヌや琉球の人々をはじめ日本がかつて植民地とした朝鮮や台湾などの諸民族と日本民族との関係を考える場合にどう読み解かれるのか、という問題である。そこにおいて、喜田と柳田の相違・対立が明らかに

されるならば、喜田貞吉の民族史論について、さらには柳田が樹立した民俗学についても吟味し直す一つの視点を提供することになろう。紙数も尽きるので、今後のためにその見通しだけを簡単に述べて結びとしたい。

(四)「山人」と種族文化論のかかわり ―結びに代えて―

ここまで「山人」をキーワードとして検討してきたが、改めて柳田の山人研究とは何であったのか、思わないわけにはいかない。

小熊英二は、柳田流の山人イメージの原型はすでに久米邦武の所説(『日本古代史』)に窺われると指摘している⁴⁰⁾。すなわち、「列島では、北種は北部から進入して東北地方を根拠地とし、南種は海岸から内陸に進んだ。海洋民族の南種は半島から鉄器を輸入するなどして優勢にたち、北種はしだいに山岳地帯に追いつめられ、記紀にいう蝦夷や土蜘蛛などの異族として伝えられた(同、33-37頁)。ここから、半島南部と日本の中核民族が同種だという主張がなされる。敗北した種族が山に追いつめられ異族となったという説は、やはり柳田国男の山人論に影響を与えたものと思われる」と述べている。仮に、久米の所説が柳田の山人論に影響を与えたとしても、それはまた柳田固有の思想に彩られて行ったと見るべきであろう。

柳田の想起した山人を、そのテキストを忠実に辿ることで明らかにしようと試みた赤坂憲雄は、「あらためて、山人とはいったい誰なのか。山人について語る、それは柳田にとっては何を意味していたのか」と自問し、「山人とは誰か、という問いにトータルに答えるのは、依然としてたやすくはない。資質としての他界願望がもたらした一過性の幻想的な物語であった、と断定することもできない。神隠しに遭いやすい気質がある、そう、柳田は書いた。そこに過剰な思い入れを託すこともまた、危うい。むしろ、『山の人生』の神隠し論は、柳田自身の山人に傾斜した二十年間に対する精神分析のひそかな試みであったようにも思われる。自己弁護や韜晦を見るのもよい。よじれた「政治」の匂いもする。そのいずれでもあり、いずれでもない。奇妙な資質/志向の融合の所産ではあった」と答えている⁴¹⁾。またこうも言う。「柳田はいずれにせよ、山人における『現実の基礎、を掘ることに失敗した。いわば、山人を現在の問題として、あるいは『目前の出来事、ないし『現在の事実、としてささえてゆくことに躓いたのだが、このときに、山人論は柳田の関心の中心から周縁へ、さらに外部へとしだいに位置をずらしてゆかざるをえなかったといえる。山人は常民に主役の座を明け渡し、すくなくとも著作の表層からは消えてゆく』⁴²⁾、と。

山人に熱中したこの時期、柳田は「漂泊民」についても大きな関心を寄せ、いくつもの文章を残している。赤坂は、柳田の「漂泊民」にかかわる論考についても検討を加え、「柳田の漂泊民論の系譜は、大正十四年(一九二五)の「桂女由来記」「小野於通」「史料としての伝説」を最後にほぼ立ち消えとなった。もはや、毛坊主・巫女・被差別部落、そして木地師らにかかわる柳田の関心は、まるで一過性の熱病が去ったあとのようにどこへともなく霧散してしまう。これ以降、たとえ漂泊の民が姿をあらわすことがあるとしても、あくまで常民の陰画であり、常民の海に浮かぶ微細な鏡のかけらのようなものにすぎない。やはり『日本の漂泊人種、への訣れは、確実にあつ

た。それはあきらかに、大正末年の山人への訣れと軌を一にしているものだ。ともに、それとして語られることのないままに、山人や漂泊の民への訣れはしかし、周到かつ厳格に果たされつらぬかれてゆくことになる³⁶⁾と、「漂泊民」と「山人」との「訣れ」が同じように行われたことを指摘する。

赤坂が言う、「山人」と「漂泊民」への「訣れ」、それが柳田の内部において持った意味については、すでに述べた通り、柳田の学問形成史を辿る営みとかかわって幾多の論考が提出されてきた。しかし、柳田にとって山人とはいかなる意義を持つ存在であったのか、はっきりと掴むのはむずかしい。柳田の学問を検討する上から、柳田が山人を全面的にせよ部分的にせよ放擲したことは確かめえても、山人研究それ自体の意味は赤坂の丹念な読みをもつてしても十分に掘り尽くすことはできなかったと言うべきであろうか。

ところで、柳田と喜田の間のやりとりを振り返ってみると、柳田は喜田と交差しながらも、喜田の研究とは距離を置き、接近することを避けていたようにみえる。柳田が喜田の論考にふれるのは、喜田の報告資料を引く場合か、所説に反論を加える場合にほぼ限られ、喜田の所論を手掛かりに自らの思考を伸ばすという態度はほとんどみられない。明治41年3月15日、報徳会の月例講演会における喜田の講演「特殊部落の改善」に対し異論を唱えたことをはじめ³⁵⁾、『石神問答』や喜田の『読史百話』中の「犬神人」にかかわる批判、オシラ神をめぐる激しい論争などにみられる通りである。

しかし、喜田の「特殊部落の改善」をめぐる議論については、柳田は後に喜田に同調するような理解をみせ³⁶⁾、異人種説を放棄するべく考えを改めている。その変化が何によってもたらされたかは不明であるが、喜田の考えを容れたもののようにはどうも思えない。そのひとつの可能性として、当時の学術研究に広く影響を与えた社会進化主義の影響を推測することが、あるいはできるかもしれない³⁷⁾。

喜田と柳田の間でひときわ鮮やかな対照をなすのは、朝鮮民族にかかわる動きである。喜田は周知のように「朝鮮民族とは何ぞや」(『民族と歴史』1巻6号)や「日鮮両民族同源論」(『民族と歴史』6巻1号)などを書き、日鮮同祖論の立場を貫いたのに対し、柳田の立場は鮮明ではない³⁸⁾。むしろ柳田の場合は、明治43年8月に日韓併合に関する法制作成を命じられ、その功により勲五等に叙せられたという事実が目される。山下紘一郎は官僚時代の柳田の仕事を跡付けたなかで、「朝鮮民族に癒すことのできない傷跡を残すことになったこの歴史的な大事件について、完全に沈黙を守っている」ことを指摘するとともに、「植民地朝鮮の法制作りに関わったことは、柳田にとって、苦い経験ではあったのである」と推察を巡らせている³⁹⁾。柳田のこの「沈黙」が彼の種族文化論に基づくものか、それとも国家観や国家意識、さらには政治判断等によるのか不明だが、喜田の所説と態度と比べてそこに大きな落差があるのは明らかである。

その後、柳田は『郷土研究』を発刊し民俗学の樹立に進んで行く。そして、その編集作業を貴族院書記官長室でも続けたことや大正6年の台湾行などをめぐって、貴族院議長徳川家達との不仲が抜き差しならぬものになり、大正8年(1919)12月に辞表を提出し官僚生活を終えることに

なるが、この年の正月に喜田が『民族と歴史』を創刊したということは、両者の関係を考えると、きに何やら示唆的である。これ以降、柳田は山人についても漂泊民についても被差別民についても、正面から論ずることはなくなる。大正9年から10年にかけて沖縄に旅行をし、琉球を古日本の鏡とみなしながら常民史を構築する方向を強く打ち出して行く。

一方、喜田は『民族と歴史』以後（9巻1号から『社会史研究』と改題。大正12年12月の第10巻4号をもって終刊）、大正13年に東北大学に移り、『東北文化研究』を出しながらなお従前の研究関心を持続させている。そこには、『民族と歴史』で展開したほどの見るべき成果は生み出されなかったと言えるが、柳田が放擲したものをなお追い続けたところに、喜田の真価のひとつを求めることはできるだろう。言葉を換えれば、柳田が進むことのできなかつたもうひとつの民俗学をめざす方向を求め続けた軌跡であったとも言えよう。柳田と喜田がこのように異なる方向へ進んで行った理由を明らかにするのは容易ではないが、そこには、研究関心の相違に止まらず研究対象との距離の測り方や感性といった個人的資質が影を落としているようにも思える。この点も含めて、喜田貞吉の研究を民俗学において吟味し直す必要が意識される。今後を期したい。

註

- 1、喜田は、「実際自分は研究の発表に急であったがために、駄作世を誤るもの少からぬことを自認して、研究の進歩とともに順次改訂増補の便多き雑誌上の発表を選んだのであった。しかし臆面もなく駄作を濫発した結果として、ともかくもいくらか自分の研究を纏めることが出来たと自信しているのである」などと自ら語っている。（「六十年の回顧」『喜田貞吉著作集14』所収、163～164頁。）
- 2、上田正昭「解説」『喜田貞吉著作集8』所収、423頁。
- 3、鹿野政直『近代日本の民間学』、170頁。
- 4、小熊英二『単一民族神話の起源』、119～120頁、128頁。
- 5、礫川全次「喜田貞吉と『賤民の歴史民俗学』」、42頁。
- 6、『歴史地理』30巻6号（大正6年12月）の「彙報」には、吉田東伍（文学博士）「国栖人に就て」、沼田頼輔「出雲民族」、西村眞次「一雑誌記者の船を通しての人種観」、黒板勝美（文学博士）「予の古代史観」、中山太郎「土俗に就て」、高橋健自「土蜘蛛に就て」、松村瞭（理学士）「現代の日本人種」、藤井甚太郎（文学士）「古代史観」の講演が行われたとある。
- 7、柳田国男「大正七年日記（9月28日）」『定本柳田國男集』別巻4、303頁。
- 8、この間の経緯については、赤坂憲雄「解題・山の人生」（『柳田國男全集』3、筑摩書房、1997年12月）に詳しい。ここで赤坂が指摘するように、「山人考」の「講演手稿」と考えるには文章が整い過ぎている感是否めず、当日の講演内容そのままであったかどうかは判断できない。しかし「彙報」の記事の限りでは大きな変更や削除等は行われなかったように読める。
- 9、谷川健一は、「山中を漂泊する民とそれにつながる底辺の人びとは彼の民俗学から一掃された。

その原因は、これまで述べたとおり、山人＝先住民説を柳田が証明できなかったことによるひそやかな挫折感であると私は思う」と述べている（『山人と平地人-ある挫折と転向-『現代思想』3-4, 123頁）。永池健二（『柳田民俗学における山人研究史の変容と展開』）や岩本由輝（『折口信夫と柳田国男』）、赤坂憲雄（『山の精神史』）らは、常民概念や学問的方法論の確立、さらには「政治的意図」（前掲岩本論文）などのかかわりから、柳田の研究の一大転機と位置づけている。

10. 永池健二は、「柳田の山人史研究の挫折は決して資料の不足といった外的な理由にあるのではなく、「柳田の山人史研究を貫いている内的論理自体の中にその根本的な原因が求められねばならない」と言っている。注意すべき見解である（註9の文献に同じ。207頁。）
11. 『定本柳田國男集』別巻4, 433～434頁。
12. 『定本柳田國男集』別巻4, 403頁, 404頁。
13. 『定本柳田國男集』別巻4, 438頁。
14. 『南方熊楠全集』第8巻, 486～7頁。この書簡の一部は、『郷土研究』4巻11号に、「諸君の所謂山男（書信一節）」として掲載された。
15. 谷川健一は、南方熊楠と柳田国男がすれ違い絶縁に至った原因のひとつを、「日本人とは何かという問いに終始し、ついに人間とは何かという問いの解決まで進み得なかった」「柳田民俗学の限界」に求めている（『縛られた巨人』のまなざし（『南方熊楠全集』8巻解説, 637頁）。
16. 上田正昭『日本民俗文化大系5 喜田貞吉』, 37～39頁。
17. 平山和彦「広い視野と先駆的な着想－『民俗と歴史』の主筆・喜田貞吉－」, 18頁。
18. たとえば、喜田は「炭焼長者譚－系図の仮托と民族の改良」の「緒言」を「『東京朝日新聞』（大正十年一月一日）の初刷りに客員柳田国男君の「炭焼長者譚」という面白い読物の第一回が出ていた」と書き起こして、次のように言う。「この筆初めに当って、自分のこの小編が柳田君の読物から思い出して執筆するに至ったことにつき、ここに深厚の敬意を同君に表す。否、ただにこればかりではない、自分の過去、現在、未来に涉っての諸研究が、柳田君からヒントを得たことのはなはだ多く、往々同君の発表の跡追いをなすものだとの譏りをも甘受するものであることをここに告白して、同君に敬意を表するものである」と述べている（『喜田貞吉著作集11』, 403頁）。
19. 「日本太古の民族に就いて」『史学雑誌』第27編第3号（大正5年3月20日）、（『喜田貞吉著作集8』所収, 20～21頁）。
20. 「山人外伝資料」『郷土研究』4巻11号（大正6年2月）。
21. 赤坂憲雄は、「山人考」について、「先住異族の末裔としての山人という像は、その真偽は措くとしても、ヒマラヤの雪男を想わせる南方の原始人類としての山人という理解とは隔絶し、民族史のあらたなる一ページを拓こうとする新鮮な野心を秘めるものであった。「山人考」では、そうした側面が意識的に押しだされているようにおもわれる」（『山の精神史』, 141～142頁）、と評している。

- 22, 「山人外伝資料」『郷土研究』1巻1号。
- 23, この旧状保持者とされる山中漂泊者とは、いったい何をイメージしたものであったろうか。サンカを念頭に置いたようにも見えるが、柳田の「『イタカ』及び『サンカ』」や「所謂特殊部落ノ種類」にはそのようなサンカ理解はみられない。また喜田は後にふれるように、サンカをはじめ漂泊民を社会の落伍者とみて異人種とは考えていなかった。
- 24, 「『民族と歴史』発刊趣意書」『民族と歴史』1-1。
- 25, 「『日本民族』とは何ぞや」『民族と歴史』1-1 (『喜田貞吉著作集8』収載)。
- 26, 「特殊部落の成立沿革を略叙して、其解放に及ぶ」『民族と歴史』2-1 (復刻『民族と歴史』第2巻, 63頁)。
- 27, 註26に同じ, 54頁, 30~31頁。
- 28, 註26に同じ, 64頁。
- 29, 註26に同じ, 64頁。
- 30, この一致については当時の考古学的・人類学的な常識として流布した見方であるとの説があり、とりわけ両者の間に特有な併行関係を物語るのではない可能性もある。
- 31, 小熊英二『単一民族神話の起源』, 95頁。
- 32, 赤坂憲雄『柳田国男の読み方』, 112頁, 114~115頁。
- 33, 赤坂憲雄『山の精神史』, 269頁。
- 34, 赤坂憲雄『漂泊の精神史』298頁。
- 35, 藤井隆至「解説」(『柳田国男農政論集』), 377頁。このときと同じく「異人種」とみる柳田の考えは、「農業政策学」(『柳田国男全集30』, ちくま文庫)にも認められる。
- 36, 柳田は、「所謂特殊部落ノ種類」(『柳田国男全集』4, ちくま文庫)において、「成程此ノ徒ノ永年ノ間土地ト密着セザリシハ或イハ(略), 機会アルモ農業ヲ嫌忌シテ之ニ就カザルシハ, 最初ヨリ漂泊ヲ性ト為セル外来ノ人民ナリシニ基ストモ推測シ得ラレザルニ非ザルモ, 帰化人ニシテ朝廷ノ保護ノ下ニ開拓殖民シ一地方ニ血脈ヲ伝ウル者少ナカラズ, 他ノ一方ニハ本来ノ日本人種ニシテ課役ヲ避ケ浮浪ト為リシ者甚シク多カリシコトハ古史ニ明カナレバ, 別ニ有力ナル傍証ヲ見ザル限りハ未ダ直チニ特殊部落ノ異人種ナルコトヲ断定シ難ク, (略)主トシテ外部ノ原因ノタメニ著シク社会上ノ地位ヲ低下セルモノト解シテ彼ラガ今ノ境涯ヲ憐レマザルベカラズ」, と述べている。
- 37, 藤野豊「被差別部落」。
- 38, 川村湊は「柳田国男は明らかにその一時期において、朝鮮の揚水尺と日本のクグツとを、朝鮮のムーダンと日本の巫女とを『比較』して考えようとしていた。そしてこの場合の『比較』とはその共通点と相違点とを分析的に、客観的に見較べるといふより、それが同根であり、同祖であること、一方から一方へと関与、影響し、転移したものであることを証明しようとする事であったといつてよい」, と述べている(『大東亜民俗学』の虚実』, 71頁)が、こう断定するにはなお留保すべき点があるように感じる。

39, 山下紘一郎「第五章官僚時代」(柳田国男研究会編『柳田国男伝』, 325頁)。

引用文献一覧

- 赤坂憲雄 『山 of 精神史』1991年10月, 小学館。
----- 『漂泊の精神史』1991年11月, 小学館。
----- 『柳田国男の読み方-もうひとつの民俗学は可能か』, 1994年9月, ちくま新書。
----- 「解題・山の人生」『柳田国男全集』3所収, 1997年12月, 筑摩書房。
岩本由輝 「折口信夫と柳田国男」『柳田国男を読み直す』, 1990年9月, 世界思想社。
上田正昭 『日本民俗文化大系5 喜田貞吉』1978年5月, 講談社。
----- 「解説」『喜田貞吉著作集8』所収, 1979年12月, 平凡社。
小熊英二 『単一民族神話の起源-＜日本人＞の自画像の系譜-』, 1995年7月, 新曜社。
鹿野政直 『近代日本の民間学』1983年11月, 岩波新書。
川村 湊 『「大東亜民俗学」の虚実』, 1996年7月, 講談社選書メチエ。
喜田貞吉 「日本太古の民族に就いて」『史学雑誌』第27編第3号(大正5年3月20日), (『喜田貞吉著作集8』所収, 20~21頁)。
----- 「「民族と歴史」発刊趣意書」『民族と歴史』1-1所収, 1919年1月, 不二出版(復刻)。
----- 「「日本民族」とは何ぞや」『民族と歴史』1-1所収(後, 『喜田貞吉著作集8』に収載), 1919年1月, 不二出版(復刻)。
----- 「特殊部落の成立沿革を略叙して, 其解放に及ぶ」『民族と歴史』2-1所収, 1919年7月, 不二出版(復刻)。
----- 「炭焼長者譚-系図の仮托と民族の改良」『民族と歴史』5-2所収(後, 『喜田貞吉著作集』11所収), 1921年2月, 不二出版(復刻)。
----- 『六十年の回顧』, 1933年4月, 自刊。(後, 『喜田貞吉著作集14』に収載)。
----- 『喜田貞吉著作集8 民俗史の研究』(上田正昭編集), 1979年12月, 平凡社。
----- 『喜田貞吉著作集10 部落問題と社会史』(上田正昭編集), 1982年6月, 平凡社。
----- 『喜田貞吉著作集11 信仰と民俗』(上田正昭編集), 1980年11月, 平凡社。
----- 『喜田貞吉著作集14 六十年の回顧・日誌』(伊東信雄編集), 1982年11月, 平凡社。
磯川全次 「喜田貞吉と「贱民の歴史民俗学」」関東歴史民俗学会編『歴史民俗学』3号所収, 1996年2月, 批評社。
谷川健一 「「縛られた巨人」のまなざし」『南方熊楠全集8 書簡II』所収(解説), 1972年4月, 平凡社。
----- 「山人と平地人-ある挫折と転向-」『現代思想』3-4, 1975年4月, 青土社。
永池健二 「柳田民俗学における山人研究史の変容と展開-「過渡期」における方法的成熟の一側面-」『柳田国男研究資料集成』, 1987年4月, 三一書房。(初出『共同研究 柳田国

男の学問形成』1975年 白鯨社。)

日本歴史地理学会 『歴史地理』30巻5号, 1917年11月。

----- 『歴史地理』30巻6号, 1917年12月。

平山和彦 「広い視野と先駆的な着想—『民俗と歴史』の主筆・喜田貞吉—」『民俗と歴史解説・総目次・索引』所収, 1997年11月, 不二出版。

藤井隆至 「解説」『柳田国男農政論集』所収, 1975年7月, 法政大学出版局。

藤野 豊 「被差別部落」『岩波講座日本通史第18巻近代3』, 1994年7月, 岩波書店。

南方熊楠 「諸君の所謂山男(書信一節)」『郷土研究』4巻11号, 1917年2月。

----- 『南方熊楠全集8 書簡II』, 1972年4月, 平凡社。

柳田国男 「農業政策学」『柳田国男全集30』, 1991年1月, ちくま文庫。

----- 「所謂特殊部落ノ種類」『柳田国男全集4』, 1989年10月, ちくま文庫。

----- 「大正七年日記」『定本柳田国男集』別巻4所収, 1971年4月(新装版), 筑摩書房。

----- 「山人考」『柳田国男全集』3所収, 1997年12月, 筑摩書房。ちくま文庫。

山下紘一郎 「第五章官僚時代」『柳田国男伝』(後藤総一郎監修・柳田国男研究会編著)所収, 1988年11月, 三一書房。

新刊紹介

任章赫著

『祈雨祭と地域社会』

現在、韓国の文化財庁国立文化財研究所芸能民俗室にて学芸研究官として勤めている任氏は、筑波大学で民俗学を練磨された経験があり、紹介の著作はそれの書き下ろしである。留学からの帰国以後、文化財研究所暮らしの数期間は数多い新しい資料に接する良い機会でもあったろうと思われるが、巫女との関連資料が増えたりしたのはその証になる例である。とくに氏は、韓国の伝統の村落社会において雨乞いがどういう変化を辿ってきたのかを、稲作・焼畑・漁撈という三つの異なる生産手段を持つ村落社会からその相違を探そうとしたのは興味深い。さらに、

稲作とか焼畑とか漁撈とかいう生産手段間の境界が微々たる区分かそれとも無意味に近い状態になってしまった現状からみると、氏の視点は、その本来の雨乞いの持つ重要性とともにさらに増してくる。さて、極く最近韓国で見られるようになった雨乞いからは、そういった氏の視点によって何がいえるのか、また雨乞いの諸種を収斂できるのはいま巫女とともに外に何が出現したのかはこれから新たに問われるべき問題だと思われる。

(片 茂永)

1999年11月刊, 民俗苑(韓国語)10,000ウォン